

船室にもぐりこみ、思う存分、笑ってから、再びデッキに出たのです。

昔、教えて頂いた中学、学院の諸先生、友人、後輩連も来ていてくれました。銅鑼が鳴ってから一件の背広を届けに、兄が、母の表現を借りると、スルスルと猿のように、人波をかきわけ登ってきてくれました。これは帰朝してから、聞いたことですが、故郷鎌倉での幼馴染の少年少女も来ていてくれたそうです。なかでも、波止場の人混みのなかで、押し潰されそうになりながら、手巾をふっている老母の姿をみたときは目頭が熱くなりました。周囲に、家の下宿人の親切な人が、二人来ていてくれたので安心しながら、ぼくは、兄が買ってくれたテエプを抛りましたが、なかなか母にとどきません。

女学生の一群にとび込んだり、学校の友人達の手にはいったりしても、母にはとどかないのです。その内、漸く、一つが、母の近くの、サラリイマン風の人を取られたのを、下宿人のHさんが話して、母に渡してくれました。少しヒステリイ気味のある母は、テエプを握り、しゃくり上げるように泣いていました。あまり泣くのをみている内、なにか、ホッとする気持になり、左右を見廻すと、大抵の選手達が、誰でも一人は、若い女のひとに来て貰っている、花やかさに見えました。

ぼく達のクルウでも、豪傑風な五番の松山さん迄が、見知り越しのシャ・ノアルの女給とテエプを交しています。殊に美男な、六番の東海さんなんかは、テエプというテエプが